

CAFFÈ

モン

タン

展

盛岡が華やいだ一九六〇年代
最先端のアートと詩、音楽、
そして味覚を発信した

モンマスこと小瀬川了平が
そそいだ最上級の芸術エッセンス

村上善男 作品展
村上善男 作品展
村上善男 作品展

《会期》

2021年

12月11日「土」— 2月23日「水・祝」

2022年

《開館時間》

午前8時30分〜午後5時（入館は午後4時30分まで）

《休館日》

月曜日（月曜が祝日の場合は、その翌日）、年末年始（12/29—1/3）

《入館料》

一般400（350）円／高校・学生250（200）円／小学・中学生150（100）円

《主催》

萬鉄五郎記念美術館 岩手県花巻市東和町土沢五-1135 〒028-0114 TEL:0198-424442 FAX:42-4405

《後援》

岩手日報社、岩手毎日新聞社、盛岡タイムス社、河北新報社、朝日新聞盛岡総局、毎日新聞盛岡支局、産経新聞盛岡支局、エヌ盛岡放送局、FM77.7（岩手放送）、テレビ岩手、めんこいテレビ、岩手朝日テレビ、エフエム岩手、ラヂオ・もりおか、奥州エフエム、花巻ケーブルテレビ、えふえむ花巻

萬鉄五郎記念美術館

※展覧会のスケジュール、内容は都合により変更、および中止の可能性があります。 <https://www.city.hanama.kiwanet.jp/bun/asports/dunka/forzutsu/syogov/002101.html>

花巻の台温泉「台湯館」の息子として生まれた小瀬川了平は、東京大学文学部中退後の一九五六（昭和31）年、盛岡の大通り裏に「どん底」酒場をオープンする。新宿の「どん底」を模したこの酒場の名物ドリリンクもまた本家と同様に「ドンカク」（どん底カクテル）。ただし配合は小瀬川秘伝のもので、ジンベースにダレナディンシロップ、ライム、ジュースにカルピスを隠し味に加え、それにジンジャーエールを注ぎレモンピールを添えた、ピンク色した洒落た飲み物だった。これが大人気で日に四、五〇〇杯出ること珍しくなかった。



オープン当時の「café Montan」の外観。Montanの看板ロゴは、地元画家でデザイナーの鈴木英一郎。



オープン当時の「café Montan」の内装。モダンでシックな雰囲気の人気を呼ぶ。その後、何度か改装。



モンマス（Montanのマスター）こと小瀬川了平

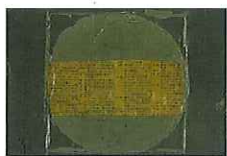
吹き抜けだった「どん底」の一階を改装し、凝ったつくりのモダンな「CAFÉ MONTAN」を一九五九（昭和34）年にオープンする（一階が「Montan」、二階が「どん底」として数年間営業。後に一、二階とも「Montan」となる）。Montan・コンテンポラリーシリーズとして東京や地元で活躍する美術家の展覧会を開催、画廊スナックの様相を呈してゆく。若き美術家や詩人、さらにはジャズ評論家の清水俊彦が毎月新譜を持つ。



詩集『憂なしで』土井晩翠賞を受賞した若き詩人、中村俊亮が「Montan」のバーテンダーを勤めていた。



池田龍雄《百仮面》インク・紙 1962（昭和37）年 「Montan・コンテンポラリーシリーズ」は1962年から始まる。第1回は「池田龍雄展—百仮面—」



馬場彬《作品》ミクストメディア 1963（昭和38）年 / 第5回Montan・コンテンポラリーシリーズは「馬場彬展」1963（昭和38）年



末松正樹《無題 (02)》水彩・鉛筆・紙 制作年不詳 ときの忘れもの 所蔵 / 第4回Montan・コンテンポラリーシリーズは「末松正樹展」1963（昭和38）年

賞を「M（Montan）美術賞」と銘打ち、45歳以下の美術家を対象に

参してレコード・コンサートを開くなど、美術、音楽、文芸といった芸術文化の華々しいコミュニティが形成されていく。

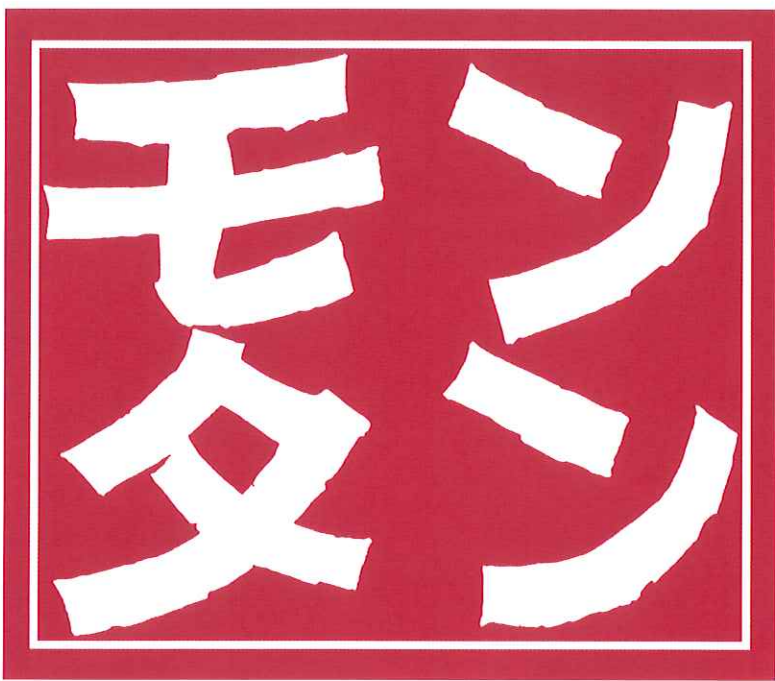


「IVOU 形象展」1962（昭和37）年 写真作品45点が並び、地元からは高橋昭八郎、伊藤元之が参加。会期中2回にわたり北園克衛、清水俊彦が来店し、音響詩の実験と座談会を開催。あわせてフランス、アメリカの詩のレコードも発表する。



「ジャズ・レコードコンサート」毎月、ジャズ評論家の清水俊彦が新譜を持ち寄り、レコードコンサートを開催。向かって左から、小瀬川了平（モンマス）、清水俊彦（ジャズ評論家、詩人）、高橋昭八郎（詩人、IVOUメンバー）

新人の発掘と支援を目的とするコンクールを立ち上げる。審査員は美術評論家の中原佑介があたり、M（Montan）賞受



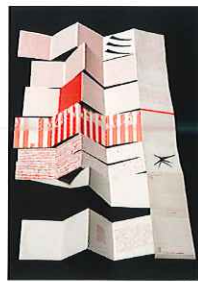
賞者は、銀座のサトウ画廊での個展を約束するといふものだった。時代を担う才能豊かなアーティストを発掘するといふ、岩手から全国に向け美術文化の発信基地となっていく。



第3回M（Montan）賞公募用紙（1965年）



第3回M（Montan）美術賞作家展「松尾一男 23075の円」会場 1966（昭和41）年（銀座・サトウ画廊）



- 村上善男《頻度n.X》ミクストメディア 1962（昭和37）年
- 大宮政郎《cyborg plan》ミクストメディア 1963（昭和38）年
- 村山健男《作品》テーブル、ボード、鏡 1964（昭和39）年
- 瀬川昌男《作品3》ペンキ・ベニヤ 1965（昭和40）年頃
- 桐山龍司《使者》鉄・溶接 1967（昭和42）年
- 杉村英一《作品5》ステンレス・アクリル絵具・紙・ベニヤ 1968（昭和43）年
- 高橋昭八郎《ボエムアニメーション影》（裏面）印刷・紙 1968（昭和43）年

味覚でも、こだわりのコーヒーを提供したり、盛岡でいち早くソフトクリームを販売、さらに小瀬川が開発した「どんカク」や「アラ・モンタン」（辛くて熱いスープ・スパゲッティ）と、盛岡の新たな名物を開発していく。本展は、今日、語られなくなった盛岡の伝説の店、初代「CAFÉ MONTAN」のマスター小瀬川了平と芸術家たちとの足跡をたどり、そこに集った美術家や詩人、文化人たちを紹介しします。



盛岡のソウルフード「ア・ラ・モンタン」